日本古典書誌学論

【新訂版】

The Bibliouraphical Study of Classical Japanese Texts

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授
佐々木孝浩
Sasaki Takahiro

巻物や冊子といった書物の装訂や形態にはヒエラルキーがあり、書物とそこに保存されるテキストには相関関係がある。また書物に保存されているのはテキストのみではなく、書物とテキストにまつわる様々な情報も込められているのである。そうした相関性や情報を把握したうえで、作品を具体的に読み解く必要がある。

古典文学と
書物をめぐる相関を
鮮やかに解き明かす

書誌学は文学作品を読み解く上で何の役に立つか？

古典研究必携
名著の新訂版

文学通信

【新訂版】

日本古典書誌学論

The Bibliographical Study of Classical Japanese Texts

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授
佐々木孝浩
Sasaki Takahiro

文学通信

目次

はじめに……1

序編

第一章　日本古典書誌学論序説……7

はじめに……7　和本の装訂の種類……9　装訂と作品の関係……17

装訂の格と改装……25　おわりに……28

第二章　日本語の文字種と書物の関係について……30

はじめに……30　日本語の文字の種類……31　文字種と装訂の関係……34

文字種と版式の関係……40　おわりに……46

第一編　巻子装と冊子本

第一章　冊子本の外題位置をめぐって……51
はじめに……51　書誌学文献における題簽位置の記述……52
入木道伝書における題簽位置の記述……57　歌書の古写本にみる外題の位置……64
物語の古写本にみる外題の位置……75　外題位置の違いが意味すること……81
おわりに……84
第二章　絵巻物と絵草子――挿絵と装訂の関係について――……89
はじめに……89　巻子装と物語……90　絵巻物という存在……92
絵入り本という存在……94　絵入冊子本の登場……99　おわりに……105
第二編　巻子装と歌書・連歌書
第一章　勅撰和歌集と巻子装……111
はじめに……111　日本における巻子装……112　巻子装と勅撰和歌集……115
勅撰集奏覧本の実態……119　奏覧本の清書者……130　現存する奏覧本……139
天皇周辺の巻子本……157　おわりに……163

第二章　勅撰和歌集の面影――『新撰菟玖波集』の巻子装本をめぐって――……174
はじめに……174　『新撰菟玖波集』の巻子装……175
『新撰菟玖波集』成立に纏わる伝本……177　奏覧本の可能性の書誌的検討……185
奏覧本の可能性の本文的検討……192　おわりに……197
慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵『新撰菟玖波集』存巻一【翻刻】……202
第三章　巻子装であること――早稲田大学図書館蔵『新撰菟玖波集〔政弘句抄出〕』をめぐって――……212
はじめに……212　もう一つの『新撰菟玖波集』巻子本……213
『新撰菟玖波集〔政弘句抄出〕』の書式……216　その本文……219
その成立過程……223　おわりに……226
早稲田大学図書館蔵『新撰菟玖波集』一軸【翻刻】……228

第三編　源氏物語と書誌学

第一章　「大島本源氏物語」の書誌学的研究……235
はじめに……235　従来の学説……237　従来説への疑問……242

問題点の再検討……244　大島本の奥書……250　大島本の親本……253
藤本孝一氏説の再検討……261　おわりに……265

第二章　二つの「定家本源氏物語」の再検討――「大島本」という窓から二種の奥入に及ぶ――……284
はじめに……284　定家自筆本と奥入残存本文の関係……286
六半定家本の特徴……295　六半定家本の書写時期……300
四半定家本の特徴……304　四半本と青表紙……308　おわりに……312

第三章　「大島本源氏物語」続考――「関屋」冊奥書をめぐって――……316
はじめに……316　「大島本」解釈の問題点……317　「関屋」奥書の解釈……320
大島本「関屋」冊の本文……323　大島本「関屋」冊の書き入れ……329
おわりに……332

第四編　平家物語と書誌学

第一章　書物としての平家物語……337
はじめに……337　室町時代以前の平家物語写本……338

『平家物語』写本の形態的特徴……342
その他の特徴……349
『平家物語』内題のあり方……345
おわりに……351

第二章　巻子装の平家物語――「長門切」についての書誌学的考察――……353
はじめに……353
「長門切」の基礎情報……354
「長門切本」が巻子装であること……357
「長門切本」の大きさと界線の問題……361
「長門切本」の書風の問題……364
「長門切本」は絵巻詞書か……373
おわりに……375

第三章　「屋代本平家物語」の書誌学的再検討……379
はじめに……379
書誌事項の再確認……380
書誌事項の再検討……386
屋代本の書写時期の検討……392
屋代本の補写の問題……395
おわりに……397

第五編　古典文学と書誌学

第一章　定家本としての枕草子……403
はじめに……403
三巻本枕草子の呼称の問題……404

安貞二年奥書の記主の問題……407
安貞二年奥書の再確認……409
定家本としての特徴……412
定家本の受容……416
定家本の抄出本……418
定家本の流布の問題……423
おわりに……426

第二章　書物としての『枕草子抜書』……429
はじめに……429
研究史と伝本……430
伝本の書誌情報……433
伝本の関係……438
連歌書としての性格……445
おわりに……448

第三章　書物としての歴史物語……452
はじめに……452
歴史物語古写本の書誌情報……452
歴史物語の書物としての特徴……462
歴史物語に対する当時のジャンル意識……466
おわりに……468

第四章　室町期東国武士が書写した八代集
——韓国国立中央図書館蔵・雲岑筆『古今和歌集』をめぐって——……472
はじめに……472
韓国国立中央図書館蔵の『古今和歌集』……473
韓国国立中央図書館蔵の『拾遺和歌集』……475
雲岑筆写本を求めて……476
雲岑筆『後撰集』・『後拾遺集』・『金葉集』……478
雲岑の素性……484

雲岑筆八代集の位置付け……487
おわりに……489

第五章　長門二宮忌宮大宮司竹中家の文芸——未詳家集断簡から見えてくるもの——……492

はじめに……492
室町期の断簡から見えてくるもの……492
竹中（武内）家の文芸活動……495
竹中家の和歌短冊……496
竹中家の歌道師範と書流……500
「大島本源氏物語」と竹中家……503
おわりに……506

おわりに——本書で明らかにしたこと——……511

初出一覧……519
あとがき……523
新訂版あとがき……527
索引（人名・書名）……左開（1）
英文（題目・要旨）……左開（16）

はじめに

稿者の所属する中世文学会と和歌文学会の創立が共に一九五五年である。終戦の混乱を乗り越え、現代的な研究方法による日本古典文学研究が軌道に乗り始めたことを象徴する出来事と言えるのであろうか。その年から半世紀は疾うに過ぎて、親子の世代でいうと三代目の時代となっている。「売り家と唐様で書く三代目」の句ではないが、創立時の気負いや問題意識は希薄となり、研究方法は陳腐となって、蓄積された成果を知識として有していても、新しい方法も目覚ましい成果も産み出すことはなかなか出来ず、将来への展望を明確に描くこともできないのが、学会全体の傾向ではないだろうか。大学の国文（日本文）学科の減少という最大の要因があるとしても、若手の研究者の登場が極端に減ってしまった現状は、日本古典文学関連の学会も研究も大きな曲がり角にきていることを如実に示しているのであろう。

そうした危機感を抱く研究者が少なくないのも確かであるが、このような問題意識を各学会が全体として共有しているかどうかについては覚束ないというのが正直な印象である。このままでいて良いはずはないが、一体自分になにができるのかと考えると、心許ないばかりである。それでも危機感を抱く者が個々に新しい研究の可能性を求めて、様々な試みを行いそれを学会（界）に提示していくべきであり、そこに少しでも認められる部分が

あればその同志となって、批正をしつつその芽を育てる努力をしていく必要があるはずである。そうした試みの全てが等しく育つことはなくても、その内の一つでも二つでも大きく育てば、とりあえず次の半世紀の学会や研究は力強く成長していくことであろう。

稿者が研究の現状を憂うるのは、確証のない常識や定説といったものが横行していることである。どんなに社会的な地位が高く、有名な研究者であっても、その説や考えが全て正しいなどということは、神ならぬ人間には不可能なことである。その説が提示された時点では未知であったり知ることが出来なかった情報や資料が存在するのはよくあることで、改めてそうした新しい知見を取り入れて検討しなおせば、訂正や修正が必要な説は数多いはずである。

危うい定説で特に気になるのは、作品本文の保存媒体であるところの書物、つまり古典籍に関する従来の認識である。水が器に従う程ではなくても、本文も器たる書物の影響を多かれ少なかれ受けている。書物に関する認識であるところの書誌学的な解釈は、そこに保存された本文の性格の理解に直接関わる問題である。この解釈は研究の基盤・出発点を形成する問題なのであるから、これが誤っているとその上に積み重ねられ発展していった研究は、自ずと極めて危うい存在になるのは自明のことである。半世紀前の説が誤っており、それに盲目的に従って研究が続けられているとしたら、その先に何が待っているのか、よく考えてみていただきたい。

今後の学界の発展の為には、特に問題が認められる部分だけでも、一度現在の研究がスタートした時点に立ち返って検証し、新たに基礎を築き直す作業も必要なのでないだろうか。

日本書誌学会は戦前から存在していたのであるから、書誌学的な研究も古色蒼然たるものである印象があるかもしれないが、基礎的な研究は常に古くて新しいものであるはずである。書誌学の古典文学研究における有効性、あるいは活用の余地はまだまだ潤沢に存しているにちがいないのである。

しかしながら、何故その由緒ある研究方法がこれまであまり活用されてこなかったのか。それは書誌学研究に必要となる慎重さと禁欲性故に、判る者が判れば良いと、書誌学の側から文学研究に積極的に関わろうとする姿勢が希薄であったことも、否めない事実ではないだろうか。理想なのは両者が歩み寄ることであることは言うまでもない。それが可能となった時に、両者共に新しい研究の展望が開けると信じたいのである。

以上は、中世和歌文学から研究をスタートし、国文学研究資料館で助手として勤務した六年間に『国文学年鑑』の編集に携わり、論文題目を眺めただけではあっても学界全体の研究動向を肌で感じた体験と、現在の職場である慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に職を得てから、本格的に書誌学という学問と向き合うようになり、主として国文（日本文）学科の学部生・院生に向けて書誌学的研究方法の基礎を講じてきた経験を通して得た、あくまでも個人的な見解であり、文字通りの管見である。

現状を批判するからには、それなりの新しい方法や成果を提示する覚悟が必要であろう。決して胸を張れるほどの斬新さや独創性もなく、達成度・完成度共に低いものでしかないが、日本古典文学と日本古典書誌学を併せ学んできた立場から、両者を統合する研究を志した試行錯誤の道程を以下の論文によって示してみたい。

序編

第一章　日本古典書誌学論序説

はじめに

書物は主に文字情報を保存するための道具である。固有の文字を有さず、漢字文化圏に属した日本においては、書物も漢字の故郷たる中国の影響を色濃く受け継いだのも無理からぬことであった。

書物は二枚以上の紙を順序付けて、なんらかの方法でばらばらにならないように纏めたものであると定義できる。紙の纏め方によって産み出される本の形態を装訂（そうてい）と言うが、その方法により形に差ができることは言うまでもない。

日本で用いられた装訂は、基本的にすべて中国で考案されて順次伝わってきたものである。しかしながらその受容のあり方は、中国における使用の実態とは大きく異なっていた。その違いを生んだ要因はさまざまに考えられようが、その主たるものは、出版の普及の差にあると考えられる。

中国では、唐代に発明されたとされる木版（もくはん）印刷術によって製作された版本（はんぽん）が、宋代から書物の中心的な存在と

なり、同じ宋代に早くも民間出版たる坊刻本も生産されるようになった。ところが日本では、印刷の方法自体は八世紀には伝わっていたものの、経典を中心とする仏教関係書の出版が寺院を中心に行われたのみで、商業出版の確立は、朝鮮半島から伝わった活字印刷技術と、キリシタン宣教師が持ち込んだ西洋の活版印刷術が起爆剤となって、活字印刷による出版が活発におこなわれるようになる十七世紀を待たなければならなかった。

出版とは基本的に量産であり、効率が重視されるのは当然のことである。そのため中国やその影響を色濃く受けた朝鮮半島では、版本の製作に最も適した「線装」が装訂の主流となり、経典の為の「経折装」を除いて、その他の装訂法は殆ど使用されなくなっていった。

一方写本を中心とする時代が長く続いた日本では、効率とは殆ど無関係な一点物の製作においては、様々な装訂の長所や短所を理解した上で、保存する内容や製作の目的に適した装訂を選択して用いるのが普通であった。このことにより、幾種類もの装訂が長い間併存することとなったのである。

目的を同じくする道具に種類の違いが存する時には、一般的に使い分けが行われているものである。スプーンなどはその判りやすい事例であろうか。同じ形の大小のみではなく、掬う対象により先端や底が様々な形態をしていたりするのである。

それならば、日本においては少なからぬ種類の装訂が同時並行的に用いられていたのであるから、そこにも自ずと使い分けがあったはずである。この点については従来の書誌学では見過ごされてきたのではないだろうか。

水が器の形に従う程ではないにせよ、文字情報たる作品も書物の形態の影響を受けているのではないだろうか。その具体的な相関関係は、どのような装訂にどのような作品や本文が保存されているのかを検討することによって、明らかになるはずである。それが確認できれば、各装訂の利用の傾向や目的を知ることができ、また逆に装訂に注目することにより、そこに保存された作品・本文の特性や価値などを推定することも可能になると思われ

るのである。

書物を対象とする書誌学研究が、古典文学研究の基礎学であることは誰しも認めるところであろうが、その書誌学が具体的に文学研究にどのように役に立つのかについては、大方の文学研究者にはっきりとした認識はないのではないだろうか。その為もあってか、近世文学と密接な関連を有する版本研究をのぞいては、現在の日本の古典文学研究において、書誌学的な研究は活発に行われているとは言いがたいように思われる。

さまざまな切り口から書誌学研究の有効性を確認する考察を行うためにも、その前提として、日本の古典籍において重要な意味を有すると思われる、日本で使用された主な装訂について説明しつつ整理した上で、それらの装訂と保存される作品とに存する相関関係について、主に文学作品を中心として述べてみたい。

一　和本の装訂の種類

近代以前の日本で用いられた主な装訂は五種類である。順次日本に伝わり、これらが全て揃って用いられるようになったのは平安時代末の十二世紀から鎌倉時代になった十三世紀頃の間と考えられる。日本における主要な古典文学作品の記述に用いられた「平仮名」が、漢字の草書体から案出され定着するようになった九世紀後半から十世紀前半頃には、複数種の装訂が存在し使い分けられていたことは疑いない。日本の仮名文字文学の歴史は、装訂の選択と共にあった、というのはやや大げさに過ぎる表現ではあろうが、そういう視点で日本の文学史を眺めることも可能なのではないだろうか。

日本の五つの主たる装訂を、中国から伝来してきたであろう順に並べると、「巻子装（かんすそう）」「折本（おりほん）」「粘葉装（でっちょうそう）」「綴葉装（てつようそう）」「袋綴（ふくろとじ）」となる。以下にこの順で、その歴史と形態に関して簡単に説明を加えていきたい。

①巻子装

記録に拠れば、日本に『論語』や『千字文』が伝えられたのは応神天皇十六年（二八五）で、仏教の伝来は宣化天皇三年（五三八）となっている。それが事実であるかどうかはともかく、大陸からやってきた人々が日本に書物をもたらしたことは疑いのないことである。蔡倫によって紙が発明されたと『後漢書』に記される元興元年（一〇五）よりも以前から、紙が使用されていたらしいことを考えても、仏教が日本にもたらされた頃に伝わってきた書物は、「竹簡」や「木簡」を紐で繋げて作られた書物ではなく、必要な枚数の紙を糊で貼り継いだものを、末端に糊付けして固定した軸で巻き取って保存する（**図版1**）という、絹布で作られる「帛書」に由来すると考えられる、「巻子装」で作製されたものであったと思われる。

この巻子装の形で、仏教や儒教、法律に歴史に文学と、日本にとって新しく重要な知識が伝わってきたことにより、日本人は巻子装自体を貴重で尊いものと認知するようなったらしい。伝統を尊重し、先例を重視する日本にあって、十九世紀に近代化を迎えるまで、巻子装は最も正式で公式な権威ある装訂として認識され利用され続けたのである。

そのような巻子装に対する日本人の意識は、十六、七世紀頃に量産

図版１　巻子装の例　『仏生会講式』〔江戸前期〕写　１軸（個人蔵）

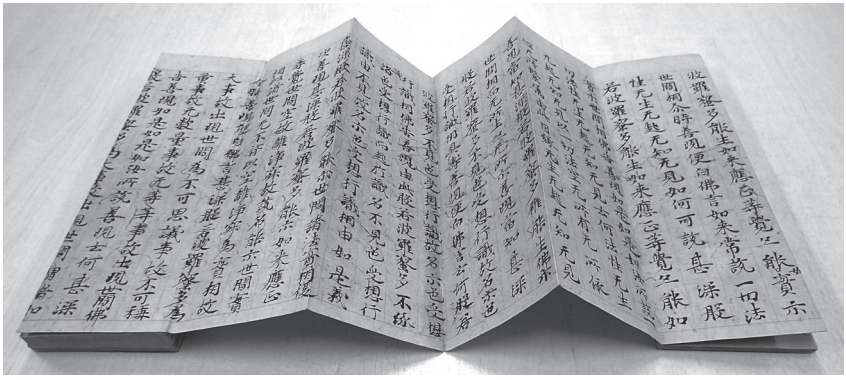
された、書道や武道等の様々な芸道における、権威付けが不可欠となる免許状的な性格を有する伝書と呼ばれる書物の多くに、この装訂が用いられていることに端的に窺うことができる。

ただし、よく知られているように、この巻子装は読むのがかなり面倒で、巻紐（まきひも）を解いて邪魔にならないようにまとめ、右手で丸めた表紙部分を、左手では本体部分を持って、肩幅くらいに開いてから、広げるのと巻き取る作業とを同時に行う必要がある。途中の読みたい箇所を直ぐに開くのは不可能であり、また読み終えた後は、開く時とは手を逆に動かす作業が必要となり、取り扱いが不便な装訂なのである。

もっともこの取り扱いの難しさと簡単に読めないことが、秘伝的な内容の保存に適しているとされた理由の一つであり、巻子装の権威が長く続いた理由でもあると考えられるのである。

②折本

この巻子装の不便さの解消のために生まれたと考えられるのが「折本」である。料紙（りょうし）は巻子装と同様に貼り継ぎ、巻くことをせずに、一定の幅で山折りと谷折りを繰り返して折りたたみ、最初と最後に少しだけ大きめの表紙を付した装訂（**図版２**）である。宋や朝鮮の



図版２　巻子から改装された折本の例　『大般若波羅蜜多経巻第五百六十一』〔鎌倉〕写１帖（個人蔵）

高麗における大蔵経の出版でも、当初は巻子装で作製されていたものが、次第に折本で作られるようになったといい、巻子装と折本の関係の深さを物語っている。

日本においても古い刷経には巻子装のものも認められるが、十三世紀以降のものは折本が圧倒的に多くなるようである。また古い時代に巻子装で製作された写経が、折本の刷経が一般化する頃からか、軸を取り去って折本に改装されることもしばしば行われるようになるのである。

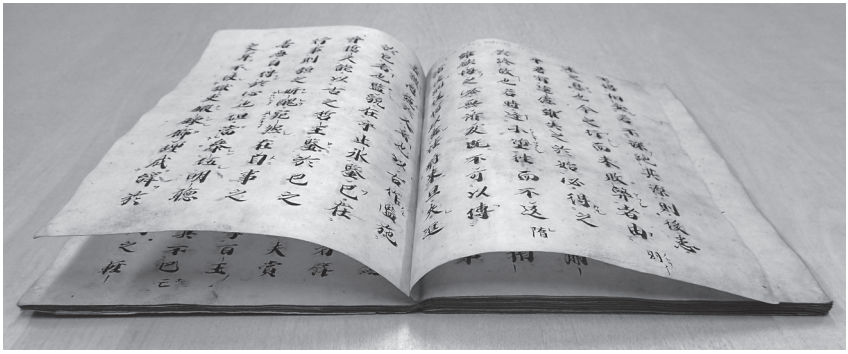
③粘葉装

東アジアにおける冊子体の本として年代がほぼ確定できる最古の例は日本に伝存している。それは僧空海が大同元年（八〇六）に唐より持ち帰った、最新の仏教の教えを記したもので、現在は京都の仁和寺に所蔵され、日本の国宝にも指定されており、冊数に因んで「三十帖策子」と呼ばれている。これらは、縦に二つ折りした紙を同じ向きに重ね、折目付近を糊付けして、必要な枚数を貼り重ねていく「粘葉装」という装訂（**図版3**）が用いられている。この装訂は、折目から全開する部分と、糊代の端までしか開かない部分が交互になるという開き方が特徴で、基本的に紙の表が折の内側となっている。「三十帖策子」でも、薄い紙は折目内側の表面のみに文字が書写されており、厚手の紙を用いたものは両面に書写がなされている。この本が日本に伝存したことにより、八世紀には中国で粘葉装がある程度普及していたことが判るのである。その中国では宋代の冊子体の版本に、印刷面を折の内側にしてこの装訂で製作されたものがあり、日本にも輸入されていたことが判っている。

この初期的な冊子体である粘葉装は、取扱いが巻子装よりも格段に便利であり、折本よりも安定した形態であるので、日本でも九世紀以降には仏書以外の書物にも広く利用されるようになったらしい。十一、二世紀に製作された文学作品の写本も、残欠本や断簡を含めれば少なからず現存している。

この粘葉装の難点は、糊が剥がれて首尾に欠落が生じやすいことであるが、それは巻子装や折本でも同様である。最も困るのは虫の害に特に弱いことである。韓国で李朝の版本を手にとっても虫損は見つからないが、比較的温暖で多湿な日本では、昆虫の活動も活発で、書物は常に紙を食す「死番虫（しばんむし）」の幼虫の被害に気をつけなければならなかった。栄養価の高い糊を多用する粘葉装は虫にとっては最高のごちそうなのであり、糊代部分が集中的に喰われたものをしばしば目にするのである。紙を繋ぐ部分がもろくなるのであるから、料紙が一枚づつばらばらになってしまい、もはや本とは呼べない状態になってしまっていることも少なくないのである。

その為もあって、次第に別の冊子体の装訂がこれに取って代わるようになり、十三世紀頃からその使用例が激減するようである。ただし、紙に穴を開ける必要もなく、針と糸も不用な簡便な装訂であることからか、仏教界ではその後も長く用いられた。特に空海を宗祖とする真言宗では、空海を讃仰する念が強かったので、空海が請来した粘葉装はその所縁の装訂として、十九世紀頃まで用いられ続けた。また十七世紀頃までは真言宗を中心とする仏書の出版にも用いられたが、次第に線装に取って代わられるようになったのである。



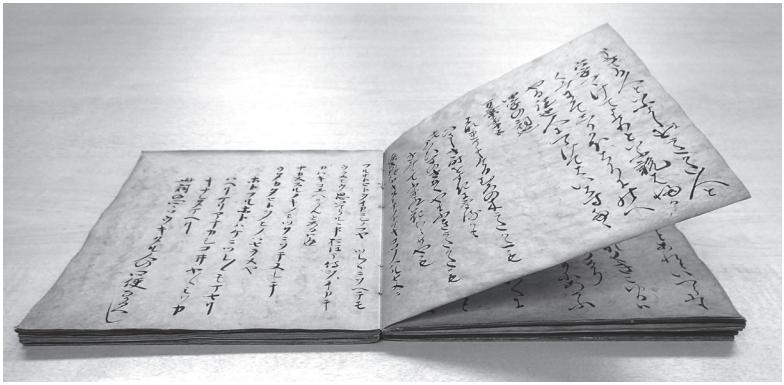
図版３　粘葉装の例　『貞観政要』〔鎌倉〕写　４帖の内
（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵）

④綴葉装

粘葉装に代わるようにして用いられるようになったのが、同じ冊子形態の装訂である綴葉装である。基本的に両面書写に堪えうる高級な料紙を、五～八枚程度重ねて、纏めて縦半分に折ったものを「帖」や「折り」と言い、これを必要なだけ用意して、各々の帖の折目に四つ程度の穴を開けて針で糸を通し、帖同士を糸で繋いで固定する装訂法（**図版4**）である。この装訂には日本国内でも複数の名称があり、「列帖装」と呼ばれることも多いが、古くは「大和綴」とも称していたことが知られている。

「大和綴」という呼称は、冊子体の表紙の上から、背近くに縦に四つの穴を開け、二つづつを組にして、裏からそれぞれに紐か糸を束ねたものを通して、表で飾り結びをしてわざと紐や糸の端を余らせる、装飾性の強い装訂に対しても用いられる。一対一対応が絶対条件である学術用語としては不適切であり、紛らわしさを避けるために、こちらの装訂は「結び綴」と呼ばれることが多くなっている。

大和綴と呼ばれたのは、この装訂が日本で発明されたと考えられたことに拠るのであるが、今日中国で「縫繢装」等と命名されている同装訂の書籍が敦煌から発見されたことにより、やはり綴葉装も他の装訂と同様に中国から伝わったものと考えられるに至っている。



図版４　綴葉装の例　『僻案抄』文明 13 年（1481）飛鳥井雅康写　１帖
（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵）

また影響があるのかどうかは不明であるが、二世紀には存在していたという羊皮紙（ようひし）を用いた西洋の冊子本も綴じ方が綴葉装と共通しているのは興味深いものがある。

綴葉装は紙の両面を用いるのが原則であるので、裏面まで墨が滲むことのない、繊維が極めて短く堅い「斐紙（ひし）」か、あるいは繊維が長く柔らかい「楮紙（こうぞがみ）」を徹底的に叩いて密度を濃くした「打紙（うちがみ）」を用いて製作することになる。楮紙の原料となる楮は日本の気候に適した植物で、人工栽培も可能であったので、楮紙は和紙を代表する存在である。これに対し、斐紙の原料である「雁皮（がんぴ）」は、未だに人工栽培のできないような希少な植物であるので、斐紙は高価な紙であり、それを用いる綴葉装は基本的に高級な装訂でもあったのである。

薄い紙でも一度折って折目を下に揃えてから重ね用いれば綴葉装を製作することができる。このやや特殊な装訂も様々な名で呼ばれているが、ここでは「折紙綴葉装」と「複式列帖装」の名称を紹介しておきたい。安価な紙で高級な装訂が製作できることに加えて、重い斐紙で製作される綴葉装とは異なり、軽量な本ができる点も特徴である。その使用率は綴葉装全体では極めて少数だが、十五、六世紀頃に全国を旅して連歌を指導し、その実作に必要となる古典文学を講じていた、連歌師達の用いた書物に見かけることが多いのは、軽量でありながら見栄えも良かったことが理由であろう。

斐紙は楮紙よりも堅く丈夫で、料紙を綴じるのに糊も用いないので、粘葉装よりも虫害に強かったが、やはり糸が切れるとばらばらになりやすい欠点があって、首尾の欠けたものも少なくない。

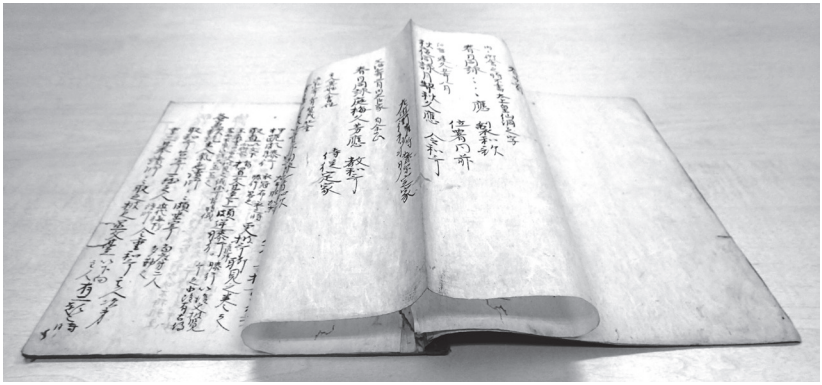
綴葉装がいつ頃中国から伝来したのかははっきりしないが、粘葉装よりやや遅れたものと考えられ、十一世紀ころから用いられるようになり、十三～六世紀の中世期には冊子体の代表的装訂となり、商業出版の成立と軌を一にして、簡便な線装が普及してからも、高級写本の装訂としての地位を保持し続けた。十七世紀には少数ながら、文学作品や特定の宗派の仏教書等をこの装訂で出版した例もある。

このように使用の歴史も長く、文学作品が書写されることも多かったので、綴葉装は日本の冊子体を代表する装訂であることは確かである。

⑤袋綴

日本の古典籍の内、特に文学作品に限っては圧倒的多数を占めるのが「袋綴」である。前述の通り中国で「線装」と呼ばれる装訂で、紙を山折りしたものを重ねて、折目と反対側を紙縒（こより）で綴じた上から表紙を付けて、縦一列に開けた四つ程度の穴を糸で縢（かが）って仕上げるもの（**図版5**）である。表紙を特別に付けなくても利用に不便がないので、紙縒で綴じた状態のままのものを「仮綴（かりとじ）」と称するが、この形も含めて考えておきたい。

この装訂がいつ頃日本に伝わったのかはっきりしないのだが、十二世紀には使用されていたことは確かである。中国では明代中期に発明されたとの説もあるようであるが、それだと十五世紀のこととなり、日本の方が先立ってしまう。表紙の付し方は不問として、料紙折目と反対の側を綴じる方法はもっと古くに発明されていたのではないだろうか。ともかく、先述の如く十三～六世紀までの冊子体の主流は綴葉装であったので、袋綴は簡便で手軽な装訂として位置



図版５　袋綴の例　『和歌書様 端作・和歌会次第』文明７年（1475）海住山高清写　１冊
（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵）

づけられていたようで、古い物ほど、手紙などとして一度用いられた「反故紙」の裏面を表にして製作した例が目立つようである。この傾向は十五、六世紀の室町時代にも続くが、この頃になると僧侶や武士階級の人々が、未使用の紙を用いて作製する例も増えるようである。

また十三世紀以降、それまでの経典の出版とは別の、宋・元版に倣った袋綴の版本が日本でも製作されるようになり、それらの存在が写本における袋綴の普及に影響を及ぼしたと考えられる。十七世紀に商業出版が成立すると、袋綴は印刷に最も適した装訂として広く用いられるようになり、写本においても一般的に用いられるようになるのである。そして十七世紀以降の平和で安定した時代において、商工業者や農民階級における識字率の高まりにともなう出版の増大と写本の量産により、袋綴は日本古典籍の圧倒的な多数を占めるに至るのである。

二　装訂と作品の関係

日本においては九世紀頃から複数の装訂が併存して用いられ、十二世紀迄には主要な装訂が揃って、目的に応じての使い分けが行われるようになったが、その使い分けの傾向はどのようなものであったのであろうか。文学作品を中心として、なるべく具体的な例を挙げて説明してみたい。

①巻子装

冊子体が未発達の頃は当然として、粘葉装に加えて綴葉装が到来し、冊子体が普通に用いられるようになってからも、巻子装が公式な権威ある装訂と見なされていたことは、勅撰和歌集の奏覧本の形態に明らかである（第二編第一章参照）。天皇や治天の君の命令によって編纂された勅撰和歌集が、完成後に奏覧される際には、その献

上された本は巻子装であるのが慣例となっていたことが、公家日記を中心とする記録類により明らかである。それらは青い羅の表紙を有し、上質の料紙に撰集の関係者か時の書の名手が清書をし、高級木材に螺鈿細工を施したような特製の軸が用いられていた（第二編第一章参照）が、やはり巻子装であることに意味があったのである。

今日、奏覧本であることが確実な伝本は現存していないが、正式な奏覧の前に行われた完成を記念する式典である竟宴で用いられた部分的な本の断簡や、下書き的な段階の写本である中書本のものと考えられる残欠本や断簡も幾種類か伝存している。これらは原本に準ずる存在であり、残存量は微々たるものであっても、その作品の本文とその系統を考える上で極めて重要な資料であることは言うまでもない。事実これらの本文を調べてみると、期待通りに良質なものであることが確認でき（第二編第二・三章参照）、現存伝本の本文の系統分類やその位置づけに有益な情報を得ることができるのである。

ただし、ここで注意しなければならないのは、現存する書写の古い和歌集の巻子本の殆どが、冊子本を大改造して作製されたものであるという事実である。紙の両面に書写してあっても、斐紙は表裏二枚に剥ぐことが簡単であるので、全ての冊子本は巻子装に改装することができる。本が伝わる内に何らかの理由で部分的に欠けてしまうことは良くあることである。読み通せない本の価値は著しく下がってしまうが、こうしていわば傷物になってしまった本を、内容としてひとまとまりとなっている「巻」単位で巻子装に改めると、巻子装としては独立したもののように見えるので、金銭的な価値は上昇するのである。そのような訳で、有欠・残欠の歌集の冊子本が巻毎に巻子装に改装されていき（勿論半丁単位で古筆切になったものも多い）、「巻子装の歌集古写本を見たら冊子改装と思え」との格言めいた文句も思いつく程に数多く存在しているのである。

こうした改装の例を除かねばならないのは言うまでもないが、本来巻子装であるものは、清書本として特別な目的を持って製作されたものである可能性が高く、従ってその本文は良質で研究価値も高い場合が多いと言える

のである。

特別な目的で使用されるということは、普段は用いないことを意味していることになるが、巻子装の古写本を調査していくと、そこに保存される内容にも大変興味深い傾向があることが判る。巻子本は何でも書いてよいというものではなく、書かれる内容が選ばれていたらしいのである。巻子装に保存されて日本に伝わってきた仏書や漢籍は当然として、血縁関係や、仏教や芸道の師弟関係を示す系図・系譜の類での使用も目立つ。これは権威ある巻子装であることが内容を保証する役目を果たすのでもあろうが、黒線や赤線が幾本も重層して繋がる形式からしても、丁を捲ることなく連続して線を目で追える利便性も、好んで用いられた理由の一つであろう。

日本の文学作品に限ってみると、日本人の漢詩文や和歌作品は書写されるが、物語作品はその種類によっては書かれない場合がある。現在の研究におけるジャンル区分に拠って整理すると、『大鏡』や『栄花物語』などの歴史的事実に基づいた歴史物語は書かれるが、『伊勢物語』や『大和物語』といった、ある和歌が詠まれた状況を説明する短編の集成である歌物語、『源氏物語』や『狭衣物語』などの架空の人物が登場する恋愛を主題とする作り物語は、原則的に巻子に書写されることはなかったのである。鎌倉時代以降の成立である仮名書きの軍記物語は、史実を踏まえてはいても、巻子装で製作されることは基本的になかったようである。とは言えこのことは、自然の法則ではなく人為的なものであるので、『伊勢物語』・『源氏物語』・『平家物語』等には極僅かに巻子本の存在も確認できる（第四編第二章参照）のだが、その少なさはやはりそれらを例外として処理してよいことを示していると思われるのである。

またこれも絶対的な拘束力のあるものではないのだが、冊子本の表紙の題名、即ち外題の位置について、和歌関係は左肩、物語関係は中央とする規則があったことが、十四世紀以降の書道関係の書物に見えている（第一編第一章参照）。この外題の位置と巻子装に書かれるかどうかには相関関係があると考えられるのだが、作り物語の

外題は中央である割合が高く、歴史物語や軍記物語には両様が確認できるのである。

このような傾向が何に由来するのかを考えることは、装訂の役割を知ることに役立つことは言うまでもない。なぜ作り物語は巻子装に書かれないのか、その理由を考える上で参考になるのが、所謂「紫式部堕獄説話」である。作り物語というのは事実ではないので、これを作るということは仏教では嘘をつく罪を犯すことになる。紫式部は『源氏物語』という物語を書いた為に、地獄に堕ちたというのである。この話は十二世紀末に成立したと考えられる歴史物語の『今鏡』や説話集である『宝物集』に既に見えている。こうした考え方の存在から確認できるのは、当時の人々にとって物語というものが、仏教的に後ろめたい存在であると認識されていたという事実であろう。日本の散文作品、特に物語の作者が不明である場合が多いのも、こうした考え方と関連しているものと思われる。このようなわけで、作り物語は書道の手本となるような抄出本を除いて、権威ある装訂である巻子装に記されることはなかったと考えられるのである。

しかし、特定の合戦の経緯と関係人物の生き様を記す軍記物語に分類されている『将門記』、説話集に分類される『日本霊異記』、あるいは随筆として認知されている『方丈記』には、古い巻子装の伝本が現存している。それらを例外的な存在として処理することも可能ではあるが、これらの書名が「記」で終わることが共通していることは注意される。「記」は事実をありのままに記す文章のスタイルのことであり、記録の意味も持っている。さらにこれらは平仮名ではなく、漢字や片仮名で記されている。内容的な分類とは別の、文章スタイルや表記と書物の形態が関係を有する可能性をこうした事例が示しているのかもしれない。『日本霊異記』や『方丈記』は仏教関連書として巻子装に書写された可能性もあり、今後の更なる検討が必要であろう。

このように、作り物語等の史実性の薄い散文作品は、原則として巻子装に書かれることはないのだが、ある条件が加わると、巻子装で作製されるのが普通になるのである。その条件とは挿絵があることである。十二～十七

世紀頃に製作された物語絵巻の遺品は数多く存在しており、日本において絵のある物語の巻子本は決して珍しい存在ではない。であるのに文字だけの物語の巻子装は極めて希であり、現存しているものも、絵を抜いて仕立て直したものがほとんどであるので注意が必要である。

この一見矛盾する状況も、古い冊子体で挿絵を有する物は殆ど確認できないという傾向（第一編第二章参照）を確認することにより、絵のあるものは巻子装で製作するという強い規範が存在していたのだと理解し納得することができるのである。八世紀の一切経に『過去現在因果経』の様な上図下文形式の経巻があることからも、この絵入りの巻子装も中国から伝わった形式であると思われる。

物語自体は巻子装には不適切であるのだが、挿絵があることが優先されて絵巻物は製作されたのである。その名に冊子の意味を有する随筆『枕草子』にも、十四世紀頃の絵巻物が存していることに、この規範がいかに強力であったかが窺えよう。

②折本

巻子装をめぐる問題は実に興味深いのであるが、巻子装と密接な関係を有する折本にも不思議な傾向がある。折本は巻子装から簡単に改装することができるし、折本を巻子装に改めるのもまた容易である。経典が書写・印刷されたりもするので、巻子装に準ずる権威を認められていたようで、巻子装同様に十六、七世紀頃の様々な芸道の免許的な性格を有する伝書の例も少なくない。またやはり巻子装と同じく系図での使用も認められるのである。

しかしながら、折本が巻子装と同様の用いられ方をしたかといえば、必ずしもそうではない。折本は折目が多いためもあってか、図的なものを除き挿絵のあるものはかなり希である。もっと興味深いのは、物語のみならず

和歌作品も原則として折本に書写されることがないということである。折本は文学作品と縁遠い装訂ということができるのである。ただし、十七世紀以降には書道の練習手本とするために、文学作品などを書写・印刷したものは数多く存している。中国伝来の法帖の影響を受けたのであろうが、開いた後で両手を離しても安定しているという特性が活用されたものと考えられる。

それでは何故に、折本には文学作品が書写されなかったのであろうか。巻子装に準ずるとすれば、物語が保存されないことは納得できるが、巻子装と親しい関係にある和歌作品が書写されない理由が判らないのである。中国の現在の書誌学では、折本のことを「経折装」等と呼ぶようだが、この用語に象徴されるように、中国ではもっぱら経典類に使用された装訂であり、そうした仏教的な印象が強いために日本では文学作品の器としては好まれなかったのであろうか。この問題の検討も今後に必要であろう。

③粘葉装

九世紀に日本に伝来してより、粘葉装は様々な作品で利用されていったことが確認できる。仏書漢籍はもとより、御物本『和漢朗詠集』や西本願寺本「三十六人集」のような文学作品の古い遺例も少なからず存しているのである。日本においては両面書写に適した紙を生産しやすかったのか、折の内面のみに書写したものは見えず、両面書写が基本となっている。形状としては縦長のタイプの他に、正方形に近いものがあり、希有な例として開くと扇型になるもの（扇面法華経冊子）もある。長方形と正方形とは使用する料紙が異なるのではなく、紙の半分の大きさを更に半分に折って仕立てる四半本か、三分の一の大きさを半分にする六半本かの違いである。全体的にみれば四半本の方が一般的であろうか。

しかしながら、粘葉装と文学作品の関係は長くは続かず、前述のように虫害に弱いことが嫌われてか、その地

位を綴葉装に奪われてしまい、十三世紀以降はもっぱら仏書専用の冊子体となるのである。綴葉装と異なり針と糸が不要で、折本と同じく紙と糊だけで簡便に作製できることが寺院で重宝された理由でもあろう。殊に粘葉装を日本にもたらした空海を祖とする真言宗で長く愛用されたことも、先に述べた通りである。中世期に高野山で刊行されたいわゆる高野版は四半本がほとんどであるが、写本では空海手沢本と同様の六半本のものが目立つようである。

挿絵のあるものは冊子体に書かれない原則ではあるが、極めて少ないながらも十二、三世紀頃の粘葉装絵入本が存在（第一編第二章参照）していて注目できる。それらは共通して折の内面に絵が存在している。折目はあるものの継目のない状態で絵を描けるので、利用されることもあったのであろうか。

④綴葉装

粘葉装に遅れて日本に伝来したと考えられる綴葉装は、文学作品でも十二世紀頃からの遺例が確認できる。和歌でも物語でも書写できる便利な装訂として利用され、十三世紀以降、商業出版が確立する十七世紀頃までは冊子体の中心的な存在となったので、文学書の古写本として馴染みのある装訂である。この装訂は、各折の真ん中の一枚を除いて、紙の右側と左側の文章が続かないという点で、他の装訂とは大きな違いがある。糸切れや虫損を補修した際に、紙の重ね方が間違えられて本文に錯簡が生じることもままあるので注意が必要である。

綴葉装は粘葉装と同様に、長方形（四半）のものと正方形（六半）のものがあり、希に横長のものも存在している。興味深いのは、十三、四世紀頃の古写本においては、長方形のものには和歌作品が目立ち、正方形のものには物語作品が目立つ点である。正方形の和歌作品や、長方形の物語の伝本も存しているが、割合に明らかな偏りが認められるのである。巻子装との関係からすると、四半本の方が六半本よりも公式性が強いと考えることは可能で

あろう（第三編第二章参照）。

綴葉装は挿絵と縁遠い冊子体であり、この装訂の本に挿絵が入るようになるのは十七世紀になってからのことである。

⑤袋綴

十七世紀以降圧倒的多数を占める袋綴だが、初期のものには、不要になった書状や詩歌の懐紙（かいし）などの反故紙を利用して作製されることが多かったことは、前述の通りである。紙の片面しか利用せず、使用済みの面は折りの内側になって見えなくなる特徴を活かしたのである。とはいえ、裏面に文字があると往々にして墨が滲み出ていて読みにくいことがあり、やはり反故は清書本や贈答用の本の製作に向かないのは明らかである。

このように実用性に富む簡略な装訂であることや、最も新しく伝わった装訂であることもあってか、保存する内容を選ばない存在であり、内典（ないてん）も外典（げてん）も、韻文（いんぶん）も散文（さんぶん）も、実に様々なものが書写されている。

しかしながら十五、六世紀頃の使用の傾向を探ると、『源氏物語』などの作り物語や、『伊勢物語』等の歌物語といった公家の世界で生まれた物語類では、綴葉装が主流で袋綴は珍しく、武家に近いところで成立した『平家物語』・『太平記』等の軍記物語写本では袋綴が圧倒的多数を占めることが確認できるのである。歌書は共に多数が存するので割合を把握するのは難しいが、この時期であればまだ綴葉装が主流であろうか。

興味深いのは、巻子装にも同様の反故を利用した例は少なくないということである。紙の片面しか使用しない共通性がしからしめるのであろうが、最も関係が遠く思える両者に近しい性格もあるのである。

それ故なのであろうか、冊子本中で最も挿絵を有する伝本が多いのは実は袋綴なのである。十六世紀頃になると、同時期に製作された絵巻物と同様に、金銀泥（きんぎんでい）を用いた濃彩色の挿絵を有する袋綴写本が作製されるようにな

る。挿絵は巻子装という規範性が何故崩れたのか、その理由ははっきりしないのであるが、数多く輸入された挿絵入り明版（みんばん）、あるいはこの頃に伝わった西洋写本などの影響もその一つとして考えられるかもしれない。ともあれ、この頃から十七世紀に掛けて、古典化した物語類や、新作の様々な性格の物語類を中心とする彩色絵入本が数多く製作されたのである。

この絵入袋綴本には、大きな縦型のものと、それと幅は同じだが高さが約半分の横長のものとがある。この関係は同時期の絵巻物に大ぶりのものと、高さがその半分のもの（小絵（巻））とがあるのと対応している。この両者に密接な関係が認められることは、高さが共にほぼ共通していることに明らかである。絵巻製作用の紙を半分に折って綴じれば袋綴は簡単に作製できるのである。袋綴は折目の存在を意識して本文を書写し挿絵を描かなければならないが、紙の片面のみの利用であることの共通性が、袋綴で絵入本を製作するようになる一因であったことは確かであろう。

綴葉装の絵入本が作製されるようになるのは、絵入袋綴本が普及した十七世紀になってからである。この時代には絵入版本もかなり普及しており、「挿絵のあるものは巻子装」の規範も過去のものとなり、袋綴絵入り写本より高級な存在として、綴葉装の絵入り写本が製作されるようになったのであろう（第一編第二章参照）。

三　装訂の格と改装

以上大まかに日本古典籍の主要な五種の装訂について、その特徴と使用の傾向や使い分け等について述べてきた。その折々に各装訂の関係などについても言及してきたが、最後に五種の格の上下関係について整理してみたい。

五種全てが揃った十二世紀以降では、巻子装・綴葉装・袋綴の順に格が低くなるものと認識されていたようで、文学作品が原則的に書かれない折本と、十三世紀頃からは文学作品が書かれることが殆どなくなる粘葉装は、この順位の埒外の特殊な存在であると整理することが可能であろう。

巻子装が最も格の高い装訂であったことは、保存される本文の傾向でも説明したところであるが、もう一つ象徴的な特徴がある。欠落のある冊子本を巻子装に改装することがあることも既述したが、他の全ての装訂は巻子装に改められるのである。折本を改めたものはもちろんのこと、綴葉装や袋綴を改めた例も少なくないことが、巻子装の権威を物語っているであろう。利用の便のため以外では、わざわざ格下の装訂に改めたりしないものであり、使いやすさを求める場合でも、手間と費用のかからない巻子装を折本にするくらいに限定されるのである。こうした改装の方向性こそが、装訂の格を明確に示しているのであろう。

文学作品を記した粘葉装は少ないので、巻子装に改めた確実な例は記憶にないが、粘葉装を綴葉装に改めた事例は数例確認している。ただしこれは粘葉装より綴葉装が格上であることを示すものではないようだ。粘葉装の糊付部分が激しく虫害に遭うと、補修しても再び粘葉装に仕立てることが難しくなる為に、やむなくという感じで綴葉装に仕立て直したものと考えられる。糊代部分をきれいに裁ち落とし、表裏を二枚に剥がして、一枚の料紙から一頁単位にしたものを四枚作り、複雑な計算をして本文の順序が狂わないように、薄い紙に片面二枚づつ、両面に四枚を貼り合わせて一紙のようにしてから、綴葉装に仕立てたのである。

綴葉装と袋綴の順位は、日本における使用開始時期の違いにも起因するものと考えられるが、使用される料紙の質の差も忘れてはならない要素であろう。綴葉装で主に使用される「斐紙」という紙は美しい紙という意味であり、艶と透明感があって丈夫で高級感あふれる紙である。これを用いて造本するとずっしりと重く存在感のある本ができあがる。またこの斐紙に似た楮の打紙を使用した例も古くからあるが、これもやはり上等な印象のあ

る本ができるのである。

袋綴にも両面書写が可能な斐紙や楮の打紙を使用した例もありはするが、十七世紀以降の豪華な造本を意図したものにほぼ限定されるのではないだろうか。料紙の裏面を利用しない本には、基本的に片面の使用に耐える薄手の楮紙が用いられるのが原則なのである。これは版本であっても基本的に同じであろう。

そうした紙の質は別として、綴葉装と袋綴の関係を端的に示す現象がある。十七世紀初頭に徳川家康によって最終的に国内が統一され、政治的な安定が訪れるとともに商業経済も発達を遂げる。これにより公家や上級の武士に限らず、商人や農民の中にも相当な財力を有する者も多くなり、書物の造本も次第に華美なものが増えていった。特にその傾向に拍車を掛けたのは、娘の婚礼に際して、家財道具や衣類と共に、当時既に古典となっていた文学作品を叢書的に揃えた写本を、漆塗り等の豪華な書物箪笥に入れたものを、婚家に持参させるのが流行したことであった。教養ある娘であることを証明する存在であり、嫁入り道具は多くの人々に披露されるので、その書物も箪笥も美麗で豪華に仕立てられたのである。これらは読むことが主目的ではないとも言え、文字はきれいであるものの、版本などのあり合わせの本文を親本とし、誤写も少なくないのが普通であり、文学の内容的な研究には適さないものである。こうした婚礼の際に製作された豪華本を「嫁入本（よめいりぼん）」と称し、現存数もかなり多いのであるが、その殆どが綴葉装であり、袋綴のものは少ないのである。この比率が両者の格の差を端的に示していると言えるであろう。

また十六世紀以前の綴葉装の本を調査していると、もともと袋綴であったものを綴葉装に改装したものに出会うことがある。これは袋綴を一丁毎に折目で切り離して一頁単位にしたものを、粘葉装から綴葉装に改装するのと同様の方法で、綴葉装に仕立てたものである。何故にこのような手間のかかることをするのかといえば、その本の価値を高めたいからに他ならない。書写の古い袋綴本の価値を一層高めるために、より高級な装訂である綴

葉装に改めるのである。

装訂の種類が多いことは、装訂を改める可能性も多いことを示すと言える。日本古典籍を正しく理解するためには、改装の実態を知ることも必要なのである。

おわりに

具体性に乏しい非常に雑駁な内容になってしまったが、以上により、中国から日本に伝わった書物の装訂の種類とその形態的特徴や、それらがどの様に日本人に認識されて使い分けが行われてきたかについて、大まかに説明できたものと考える。中国の色濃い影響を受けながらも、日本では独自の受容がなされてきたのである。

また日本の書物に関する研究も、それなりに長い歴史を有しているが、装訂の格という視点や、装訂とそこに保存される本文の種類の関係、あるいは伝来の過程で別な装訂に改められる改装の有様などについては、これまであまり取り上げられることのなかった問題である。それらの諸問題こそが稿者の興味の対象であり、研究のテーマなのであるが、まだまだ考察が未熟で、特に日本文学関係以外の古典籍の調査経験が不足していて、本稿では必要十分な説明ができていない点も少なくないことをお詫びしたい。

また稿者に最も不足しているのは中国古典籍に関する知識であり、本稿でもなるべく比較的・関連的な記述を心がけたが、物足りないものであることは否めない。共々今後の課題とさせていただきたい。

正直な感想を述べれば、日本古典籍の書誌学的研究の現状は決して盛況であるとは言えない。十七世紀以降の版本に関する研究は伝統的に一定の研究者人口を擁しているが、それ以外の分野では総じて衰退の傾向にあるように思われる。それは古くて著名な作品ほど、善本の翻刻（ほんこく）や影印（えいいん）・複製の製作がなされ、主要伝本による校本（こうほん）も

出版されており、それらを用いれば古典籍に直接手を触れることなく、一応の研究を行える環境が整備されていることを主因とするのである。

しかしながら、半世紀以前に作製されたそれらの解題や解説を再検討してみると、底本に対する書誌学的認識が誤っており、従って校訂のあり方等に問題を有する場合も少なくない。誤った基礎の上に積み重ねられた研究が、どれほど脆く危険で虚しいものであるかを、日本の大半の古典文学研究者は悲しいかなあまり自覚していないし、正しい書誌学的な見解が示されても、その意味することを理解して研究に反映させようとする動きが極めて鈍いのが現状なのである。

既知の著名な伝本の総合的な再検討を行って、改めて正しい情報を提示しつつ、新たな伝本の知見も加えることにより、従来の研究を乗り越え修正することのできる、本格的で力強い研究の道筋を付けることが、正しい書誌学研究にはできるはずなのである。デジタル技術が発達して、高精細なカラー図版を簡単に入手できるようになった今日ほど、書誌学的研究を行う環境が整っている時代はないのである。